

平成 23 年度学生生活実態調査のポイント

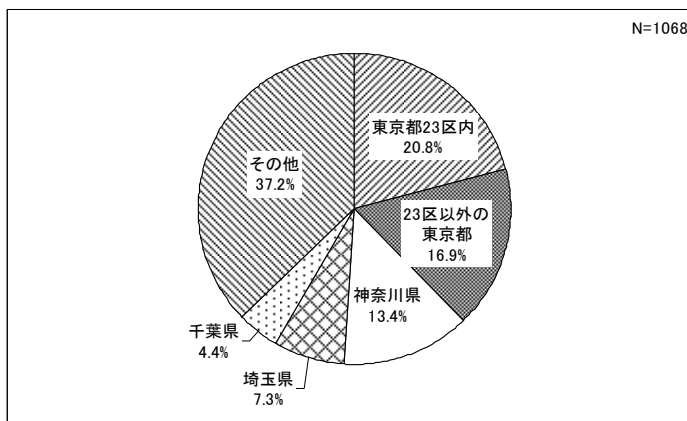
○ 調査に協力してくれた学生のみなさん

本学では、学生のみなさんの生活実態を継続的に把握することで、学生支援のあり方を検討し、改善するため、「学生生活実態調査」（学生委員会）を 2 年に 1 回行ってきました。本年度から「学生の意識と行動に関する調査」（知のキャリア形成支援委員会）と統合した上で、学部生に加えて大学院生も調査対象として実施することになりました。2011 年 10～11 月にすべての学生に回答をお願いし、1084 人のみなさんから回答を得られました（回収率 12.3%・所属別は右図参照）。調査に協力して下さった皆さん、ありがとうございました。ここでは、調査結果の一部を皆さんに報告します。より詳しく知りたい人は、この冊子の第 1 部概要編や第 2 部資料編に目を通してください。

学部・系、大学院	学部生	博士前期課程	博士後期課程	専門職学位課程	合計
人文・社会系	112	0	0	0	112
法学系	90	0	0	0	90
経営学系	96	0	0	0	96
理工学系	114	0	0	0	114
都市政策コース	6	0	0	0	6
都市環境学部	99	0	0	0	99
システムデザイン学部	98	0	0	0	98
健康福祉学部	95	0	0	0	95
人文科学研究科	0	29	27	0	56
社会科学研究科	0	10	7	0	17
理工学研究科	0	52	26	0	78
都市環境科学研究科	0	57	14	0	71
システムデザイン研究科	0	42	9	0	51
人間健康科学研究科	0	37	24	0	61
法科大学院	0	0	0	21	21
ビジネススクール	0	15	0	0	15
Total	710	242	107	21	1,080

注）所属・学年等を照らし合わせ、つじつまが合わない回答をした 4 名をここでの分析では、除去した

● 家庭状況と授業料負担 ●

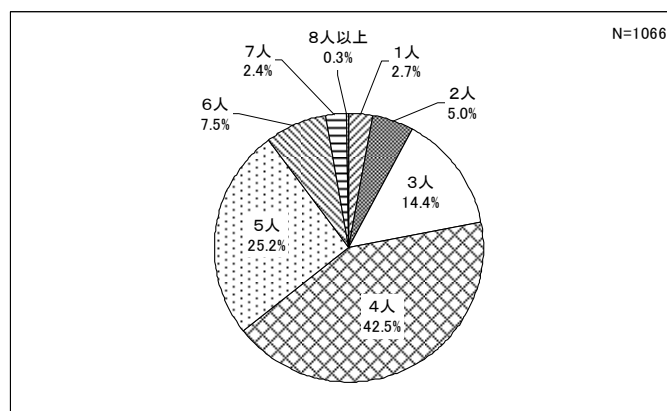


○ 1都3県出身の学生が過半数

出身高校の所在地は、全体の 62.8%が 1 都 3 県であり、東京都 23 区内と 23 区外の東京都で 37.7%となっています《左図》。今回の調査から大学院生にも回答をお願いしたので厳密な比較はできませんが、前回の調査と比べると東京 23 区内が出身である学生が若干減少しています（25.2%→20.8%）。学部生は 1 都 3 県が出身の者が 66.0%であるのに対し、博士前期課程では 58.2%、博士後期課程では 48.6%と 1 都 3 県が出身であるものが変化する傾向にあります。専門職学位課程の学生は 76.2%が 1 都 3 県が出身の者でした（この値に限らず専門職学位課程は回答者数が 21 人と少ないので、この文書に示す数値は参考程度のものであると捉えてください）。

○ 家族の人数は 4 人が最多

自分を含む家族の人数は、4 人が 42.5%と最も多く、5 人（25.2%）、3 人（14.4%）とつづきます《右図》。配偶者がいる人は 74 人いました（6.9%）。学部生にしめる配偶者がいる人の割合は 0.1%（実数で 1 人）でしたが、博士前期課程では 12.4%、博士後期課程では 39.3%、専門職学位課程 4.8%（実数で 1 人）と高くなっていました。また、家族に子がいると答えた人は 46 人おり（4.3%）、そのうち博士後期課程の学生では 26 人（24.3%）いました。



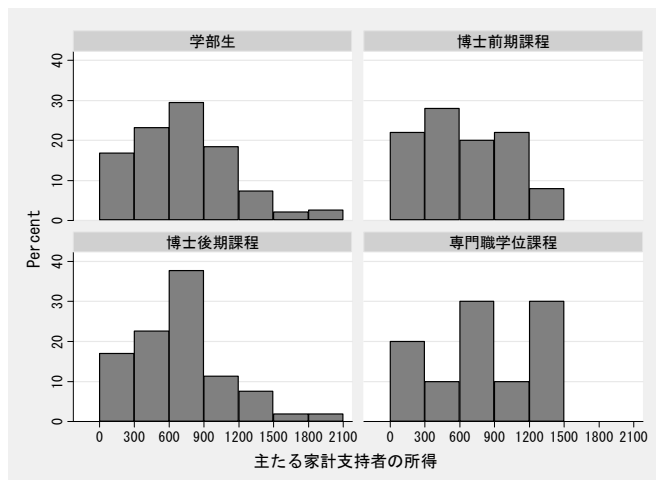
○ 大学院生になると本人または配偶者が家計支持者である者が増える

今回の調査では家計の所得がわかる人にその金額を尋ねました（わかる人＝40.3%）。学部生の主たる家計支持者は 85.9%が父、11.8%が母でこれらを合わせると 97.7%である一方、博士前期課程の主たる家計支持者は、父が 65.0%、母が 11.3%、本人が 17.1%、配偶者が 4.2%、博士後期課程では、父が 36.5%、母が 5.8%、本人が 34.6%、配偶者が 14.4%と本人や配偶者が家計支持者である割合が高くなる傾向にあります。専門職学位課程では、父 81.0%、母 4.8%（実数で 1 人）でした。

○ 家計支持者の所得が 300 万円を下回る者が 2 割弱 そのうち減免・分納制度を未申請・制度を知らない者が約 3 割

家計支持者の所得は全体をみると 300 万円未満が 18.3%であり、300 万～600 万円未満が 23.9%、600 万～900 万円未満が 28.1%、900 万～1200 万円未満が 18.0%、1200 万円以上が 11.5%でした。これを課程別に分類すると《右図》のようになります。

300 万円未満の者の授業料の減免・分納状況は、全額免除（39.1%）、半額免除（17.2%）、分納（6.3%）、不承認（3.1%）、制度は知っていたが申請していない（28.1%）、制度を知らなかった（6.3%）であり、減免制度が未申請の者や制度の存在を知らない者が合わせておよそ 3 割いると推定されます。



○ 家計支持者の所得は 400 万円未満層と 1000 万円超の層が目立つ

総務省「平成 21 年全国消費実態調査」には、全国の二人以上の世帯のうち国・公立大学生のいる世帯の年間収入の分布が明らかにされています。総務省調査と本学の調査では、本学の調査が年収ではなく所得を問うたものであるため単純な比較はできません。また、本学の調査結果はサンプルの 80.7%で、家計支持者の所得と家計支持者以外の所得のうち少なくとも片方が不明であり、家計全体の所得の分布について正確なところが分かりません。このような限界があることを承知しつつも、家計全体の

	本学(学生の家計支持者の所得と家計支持者以外の所得の合計)	本学(左記のうち学部生のみ)	全国(国・公立大学生のいる二人以上の世帯の年収)	全国(左記のうち勤労者世帯のみ)
400万円未満	16.7%	13.6%	10.8%	7.8%
400～500万円	6.7%	9.1%	8.1%	6.0%
500～600万円	6.7%	6.4%	9.5%	8.0%
600～800万円	14.8%	13.6%	19.2%	19.8%
800～1000万円	12.4%	14.5%	19.8%	23.1%
1000～1250万円	20.6%	22.7%	16.6%	18.6%
1250～1500万円	10.5%	9.1%	8.8%	9.7%
1500万円以上	11.5%	10.9%	7.1%	6.9%

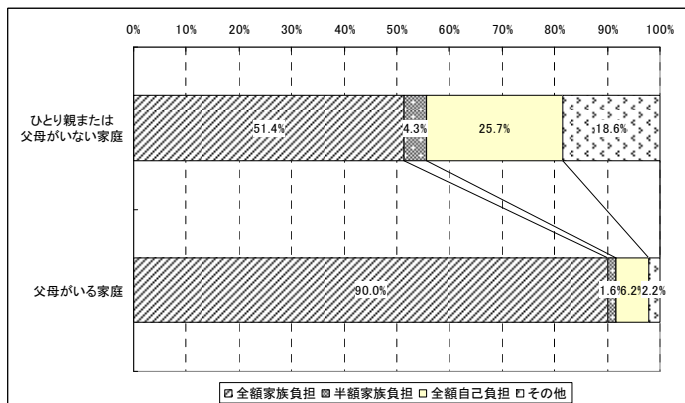
注: 全国の結果は総務省「平成21年全国消費実態調査」による。
 本学の結果は、家計支持者の所得と家計支持者以外の所得の2つが判明している209名(19.3%)の学生について記した。

所得が分かる本学学生について家計所得の合計値を算出し、総務省調査の収入階級に合わせることで、両調査の結果を比較したのが《左表》です。この表によると、本学では 400 万円未満層と 1000 万円超の層が全国に比べて目立つ傾向にあるようです。

○ ひとり親または父母がいない家庭の学部生は 4 人に 1 人が学費を全額自己負担

授業料が全額家族負担である者は、学部生で 86.2%、博士前期課程で 49.6%、博士後期課程で 18.9%、専門職学位課程で 66.7%である一方、半額ないし全額を自己負担している者は順に 10.0%、45.4%、68.9%、33.3%でした。

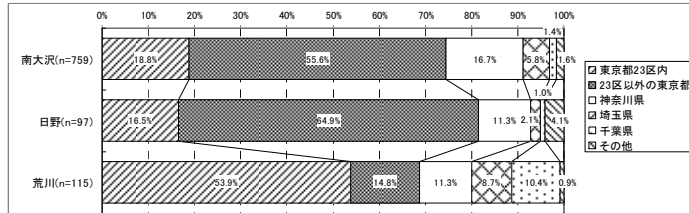
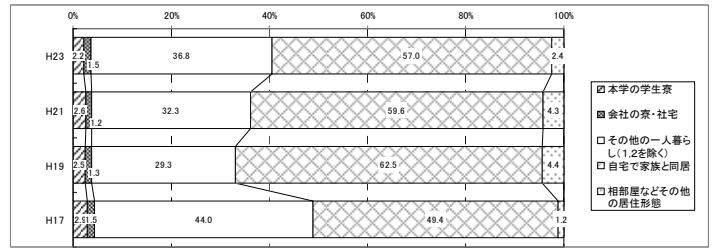
学部生について家庭状況と授業料負担のあり方をみると《右図》、父母がいる家庭の者は 90.0%が授業料を家族が全額負担しているのに対し、ひとり親または父母がいない家庭の者では、授業料が全額家族負担である者は 51.4%にすぎず、半額家族負担が 4.3%、全額自己負担が 25.7%でした。家庭状況により学費負担のあり方が大きく変わるといえます。



● 住居と通学 ●

○ 自宅生が6割弱、自宅外生が4割強

自宅で家族と同居している学生の割合は、H17年度に49.4%でしたが、今回の調査では57.0%と6割弱になっています《右図》。これに対して、いったん減少した一人暮らしは近年徐々に増加する傾向にあり、今回の調査では36.8%でした。なお、H17年度調査は開学当初に実施され、調査対象には学部1年生しか含まれない一方、本年度の調査には学部生に加えて大学院生も含まれることに留意してください。

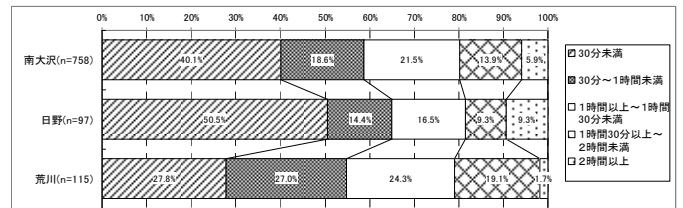


○ 荒川キャンパスの学生は23区居住者が多い

居住地をキャンパス別にみると、荒川キャンパスの学生は東京23区内の者が53.9%と半数を超えるのに対して、南大沢キャンパスや日野キャンパスでは、それぞれ55.6%、64.9%の学生が23区外の東京都に住んでいることがわかります《上図》。一人暮らし、あるいは寮などで暮らしている学生の賃料の平均は全体では5.32万円でしたが、平成19年の調査では5.62万円でしたので、若干の下落傾向にあるとみられます。通学しているキャンパス別にみると、南大沢キャンパスでは平均5.07万円、日野キャンパスの学生では平均4.75万円であったのに対し、荒川キャンパスの学生は平均6.80万円を支払っています。東京23区内に住居を構えることが多い荒川キャンパスの学生の家賃負担は他キャンパスより大きいといえます。

○ 荒川の学生は通学時間が長い

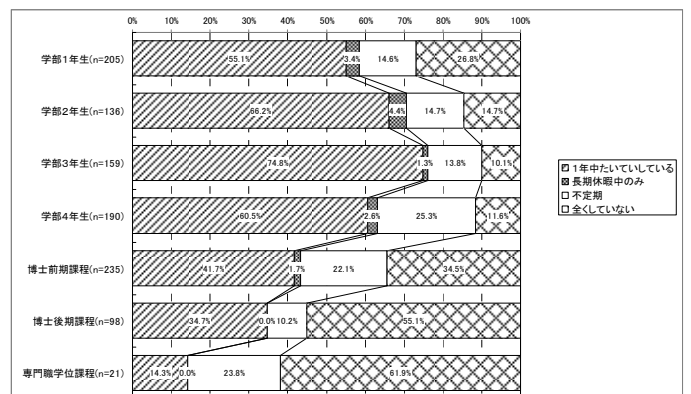
通学時間は、南大沢キャンパスと日野キャンパスでは30分未満の者が40.1%と50.5%であるのに対し、荒川キャンパスの学生は、27.8%にすぎず、1時間超の学生が45.2%を占めていました《右図》。

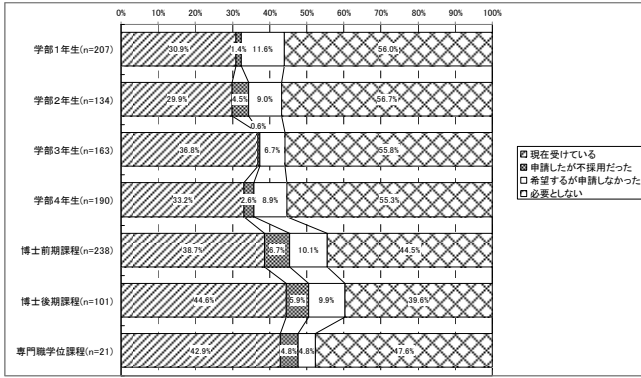


● アルバイトと奨学金 ●

○ アルバイトは75.1%の者が何らかの形でしている

アルバイトの状況について質問したところ、全体では、何らかの形で75.1%の回答者がアルバイトをしていると答えました。過去の調査結果と比較すると、全くしていないと答えた者はH19年度に20.0%、H21年度に22.3%、H23年度に24.9%と少しずつ増えていることがわかります。今年度の調査結果について学年別にアルバイトの状況を見ると《右図》、学部2～3年生で1年中していると答えた学生がそれぞれ66.2%、74.8%と非常に多い一方、大学院生では博士前期課程が41.7%、博士後期課程が34.7%、専門職学位課程が14.3%という結果が得られています。



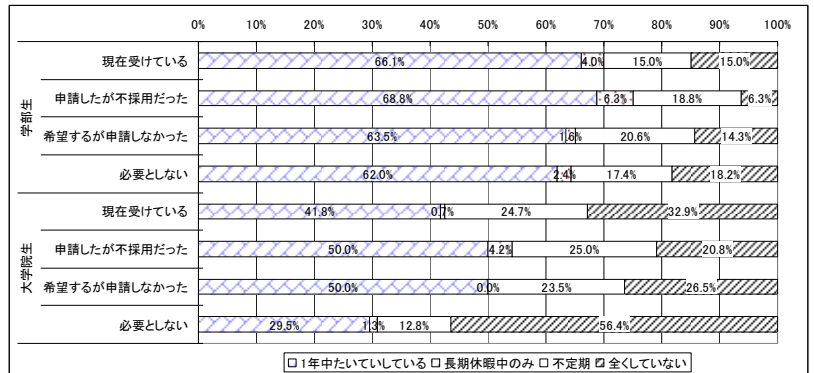


○ 奨学金を希望して受給できなかった者は院生でやや多い

奨学金の受給状況について学生全体をみると奨学金を現在受けている者は 35.3%います。この数字は H21 年度の結果に比べて 1.6 ポイント増えています。アルバイトと同じく奨学金の受給状況も学年別にみますと《左図》、博士前期課程、博士後期課程、専門職学位課程の大学院生はいずれも学部生と比較して奨学金受給者が多いことがうかがわれます。また、大学院生は奨学金を申請したが不採用だったと回答した者が、学部生と比べて多い傾向にあります。

○ 奨学金を受給できていない大学院生は、受給者よりアルバイトをしている者が多い

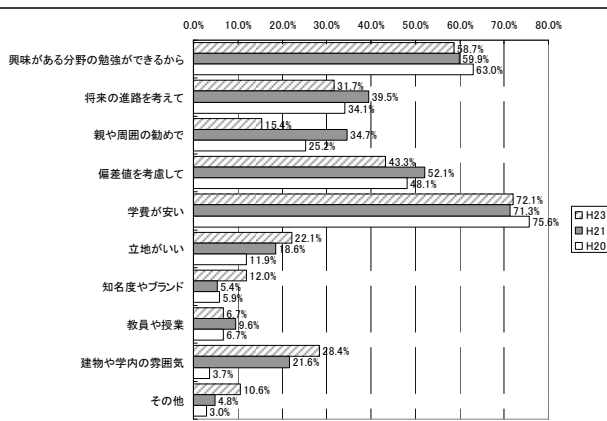
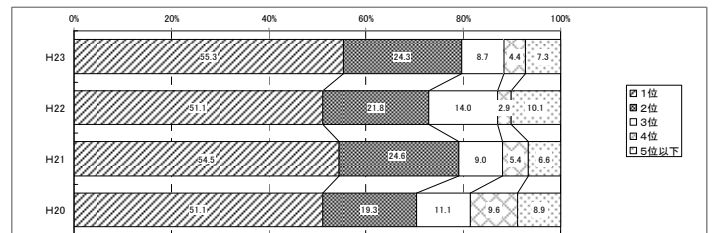
奨学金受給の状況とアルバイトの状況の関連をクロス集計しました《右図》。学部生では若干の違いはあるものの奨学金の受給状況に関わらずほぼ同様に分布しています。その一方で、大学院生では、奨学金を現在受けている者のうちアルバイトを一年中たいていしている者は 41.8%であるのに対し、不採用だった者では 50.0%、希望するが申請しなかった者でも 50.0%と開きがみられました。また、奨学金を現在受けている者でアルバイトを全くしていない者は 32.9%であったのに対し、それぞれ 20.8%、26.5%とやはり、奨学金を希望する者では少ない傾向にあります。これらのことから、大学院生が研究により多くの時間を割けるよう、一層の経済支援が必要であると考えられます。



● 入学と学業 ●

○ 志望順位は小幅な変化

学部1年生に首都大への志望順位を尋ねたところ《右図》、志望順位が第一位であったと回答したものは、55.3%と過半数を超えており、第二志望 24.3%、第三志望 8.7%とつづきます。過去 3 回の調査でも似たような傾向がみられます。

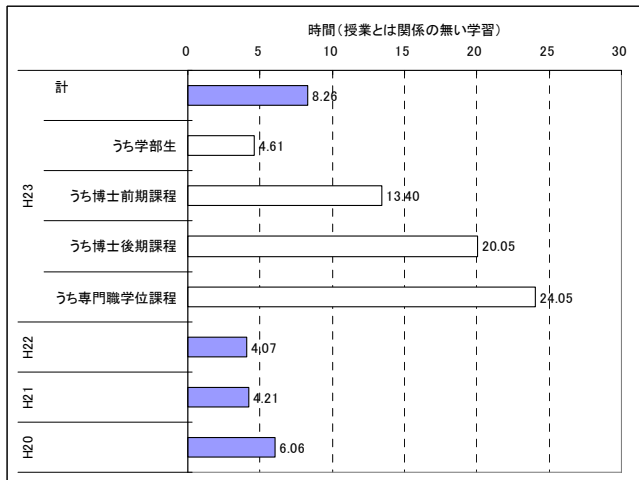
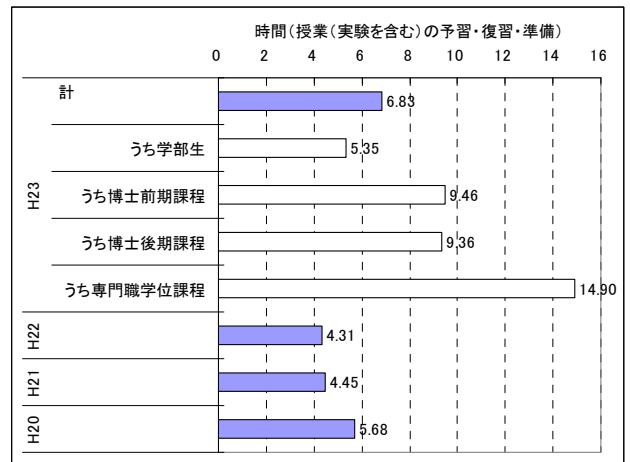


○ 志望動機として立地、建物や学内の雰囲気が増加

志望動機をみると《左図》、学費の安さや興味がある分野の勉強ができることはそれぞれ約 7 割、約 6 割と例年どおり安定しています。一方、建物や学内の雰囲気は H20 年度調査の 3.7%から H23 年度調査の 28.4%に増加し、立地のよさは H20 年度調査の 11.9%から 22.1%に増加しており、キャンパスの雰囲気や立地を学生たちが重視して、首都大を志望したことがうかがわれます。その反面、親や周囲の勧めという回答が H20 年度の 25.2%、H21 年度の 34.7%から H23 年度に 15.4%と急落していることが懸念されます。

○ 学部生の授業時間外学習は回復

学部生と大学院生とでは、授業時間外学習の時間が大幅に異なると考えられるので、ここでは大学院生を調査対象に含めた H23 年度のみ、内訳を記しました《右図》。H20 年度の 5.68 時間から一貫して下落傾向にあった学部生の授業時間外学習は、H23 年度調査では 5.35 時間に増加していることが確認されます。学部生と大学院生とでは、授業時間外学習の時間が大幅に異なり、博士前期課程、博士後期課程では 9 時間超、専門職学位課程では 15 時間弱という結果が得られました。

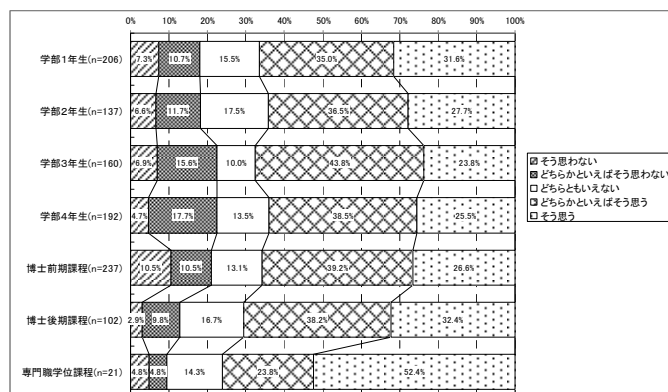
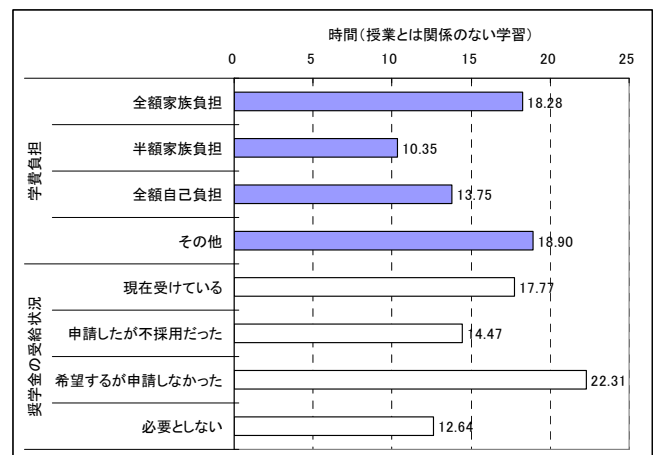


○ 学部生の授業とは関係のない学習の時間はあまり変わらず

授業とは関係のない学習の時間をみると《左図》、学部生では H21 年度の 4.21 時間、H22 年度の 4.07 時間と比べて H23 年度調査では 4.61 時間と若干の増加傾向がみられるものの、H20 年度の調査では 6.06 時間であったことから比べるとやや学習時間が少いと思われられます。大学院生は、博士前期課程 13.40 時間、博士後期課程 20.05 時間、専門職学位課程 24.05 時間であり、やはり学部生と比べると大幅に長い傾向にありました。

○ 大学院生の研究時間は授業料負担・奨学金不支給で減少する

研究時間と授業料負担のあり方との関連を調べたところ、学部生ではさほどの関連がみられなかったのに対し、右図にあるとおり大学院生では大きく関連していました。大学院生では、授業とは関係のない学習の時間を研究時間と読み替えてよいと思われれます。全額家族負担の場合は 18.28 時間であったのに対し、半額家族負担の場合は 10.35 時間、全額自己負担の場合は 13.75 時間と大きなひらきがあります。こうした違いは奨学金の受給状況にもみられ、現在受給中の者は 17.77 時間であるのに対し、希望するが申請しなかった者は 22.31 時間と長いですが、申請したが不採用だった者は 14.47 時間と短いという結果が得られました。大学院生の研究時間を確保するには、ここからも大学院生への経済支援が必要といえます。

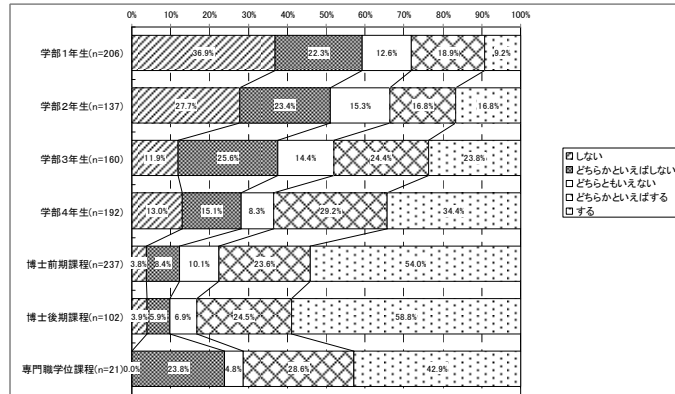
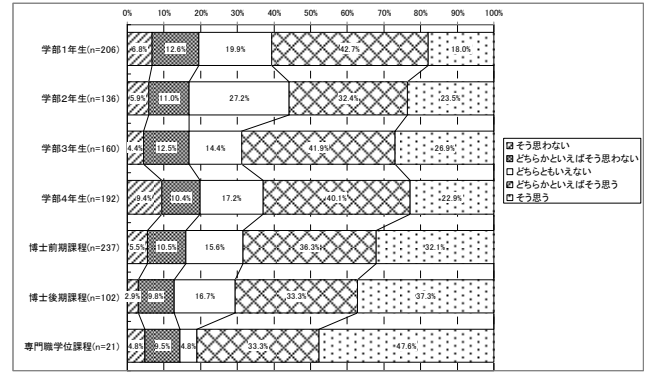


○ 大学生生活が充実している者が多数派

大学生生活の充実度について学年別にみると《左図》、いずれの学年も大学生生活が充実していると思うとどちらかといえばそう思うの2つをまとめると、およそ6~7割の回答者が大学生生活が充実していると回答しています。このなかでも、専門職学位課程の学生たちはおよそ半数の回答者が大学生生活を充実していると回答していることは注目されます。

○ 学年進行に伴い学習は充実する

また、大学での授業を含めた勉強等の充実度について尋ねた結果によると《右図》、学部1年生では、18.0%の回答者が充実していると答えています、基本的には学年があがることにより学習が充実していると考えているものが増加するようです。学部4年生は22.9%と少し低いのですが、学部2年生23.5%、学部3年生26.9%、博士前期課程32.1%、博士後期課程37.3%、専門職学位課程47.6%と増加している様子がみとれます。



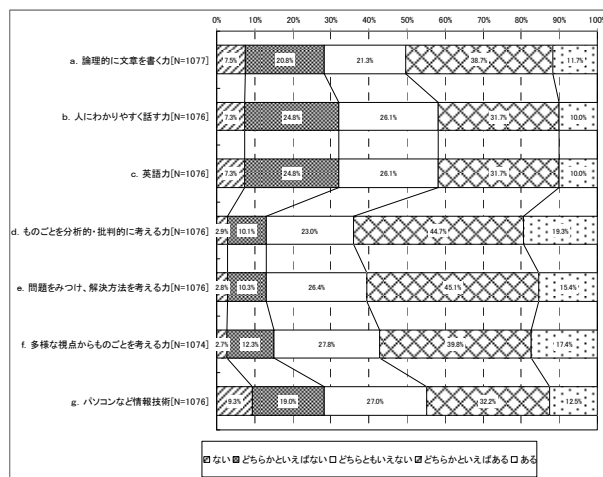
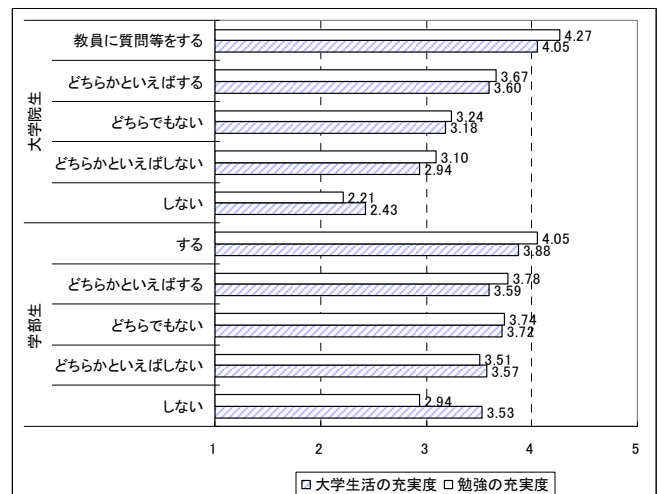
○ 教員に質問等をする学生は学年進行とともに増加

教員に質問したり、討議したり、相談したりするかを尋ねたところ、全体では、する、どちらかといえばする、を合わせると、55.7%であるのに対し、しない、どちらかといえばしない、を合わせると33.0%でした。教員に質問等をする と答える学生の割合は、やはり学部生でも学年があがるほうが高く、大学院生では約7～8割が教員との間に開わりがあるという傾向がみられます《左図》。

○ 教員に質問等をする者は大学生生活・勉強が充実する傾向

教員との関わりと大学生生活や勉強の充実度の関連を示すのが右図です。大学院生では、大学生生活の充実度も学習の充実度も、教員に質問等をする者のほうがしない者よりも明らかに高い傾向にあります。これに対して、学部生をみると、学習の充実度は教員に質問等をする者が高い傾向にあるのに対し、大学生生活の充実度はそうした傾向がみられません。

教員に質問等をすることに大学生生活や勉強を充実させる効果があると考えてよいとすると、その効果は、しない→するへの充実度の変化の大きさをみる限り、学部生より大学院生の方が高いと考えられます。



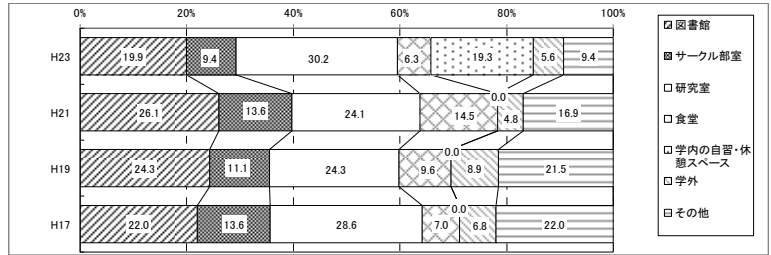
○ ものごとを分析的・批判的に考える力などの自己評価は高いが、人にわかりやすく話す力などの自己評価は低い

調査では、学生たちに自分の能力に対する自己評価を尋ねました《左図》。ものごとを分析的・批判的に考える力、問題を見つけ、解決方法を考える力、多様な視点からものごとを考える力、論理的に文章を書く力は5割以上の回答者が肯定的な評価を自らにしています。このなかでも、ものごとを分析的・批判的に考える力など3つは否定的に捉えているものの割合がおよそ1割ほどにすぎません。これらに対して、人にわかりやすく話す力や英語力はさほど高い自己評価が与えられていません。

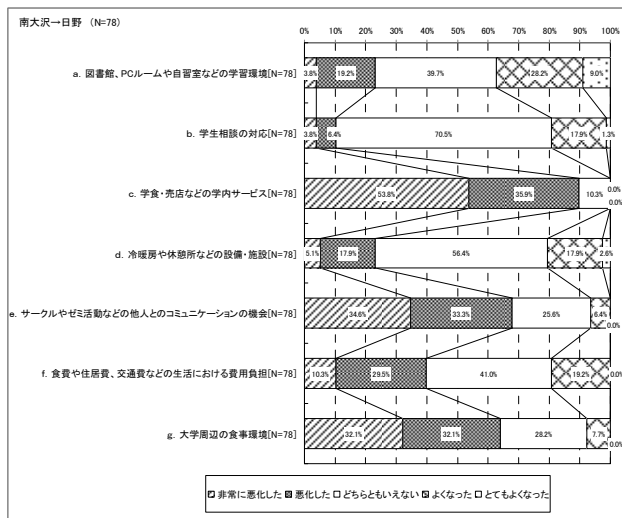
● 大学施設 ●

○ 授業の合間にもっともよく過ごすのは研究室と自習・休憩スペース

講義の合間にもっともよく過ごす場所ひとつをあげてもらったところ《右図》、30.2%が研究室と答えています。今年度の調査から設けた学内の自習・休憩スペースをあげた者は、19.3%でした。研究室



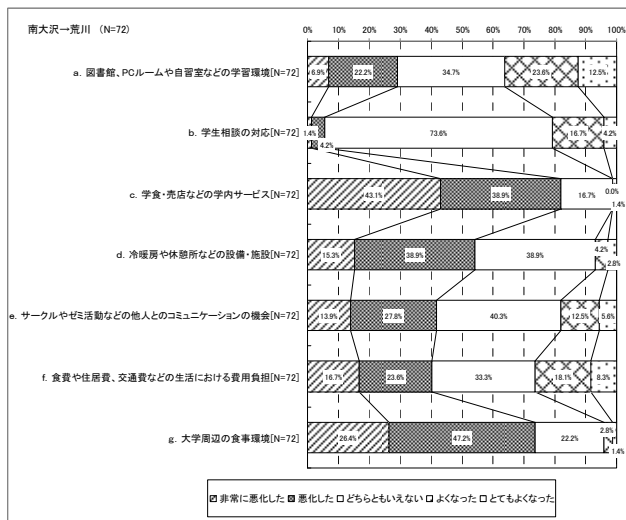
をあげる者は、学部3年生までは5%未満にすぎませんが、学部4年生では38.5%、博士前期課程で70.6%、博士後期課程では65.7%に増加します。これに対して、学内の自習・休憩スペースは学部1~3年生では2~3割の者が利用すると回答しており、専門職学位課程でも47.6%がもっともよく利用すると回答しています。



○ 分散型キャンパスへの対応状況

首都大の特徴のひとつに分散型キャンパスがあげられます。南大沢から日野、荒川キャンパスに移った学生に環境変化を尋ねました。いずれのキャンパスでも、図書館等の学習環境や、学生相談の対応の2つは、キャンパスを移ることによりよくなったと答える人が悪くなったと答える人よりもやや多い傾向にあります《左図》。

しかし、日野キャンパスでは《左上図》、学食・売店などの学内サービス、サークルやゼミ活動などの他人とのコミュニケーションの機会、大学周辺の食事環境に不満を持つ人が多い傾向にあります。また、荒川キャンパスでは《左下図》、学食・売店などの学内サービス、冷暖房や休憩所などの設備・施設、大学周辺の食事環境に不満を持つ傾向が多いようです。

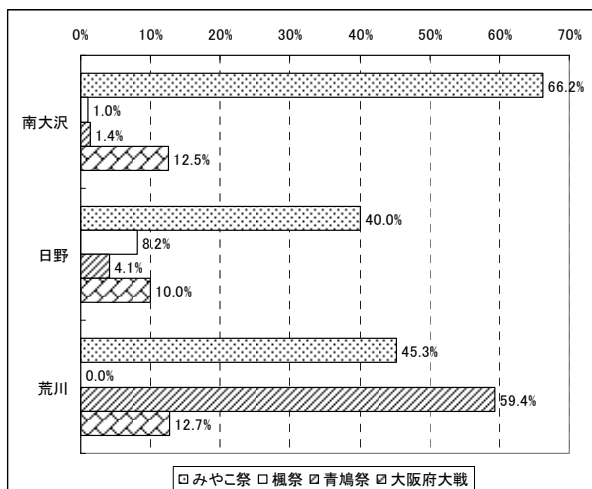
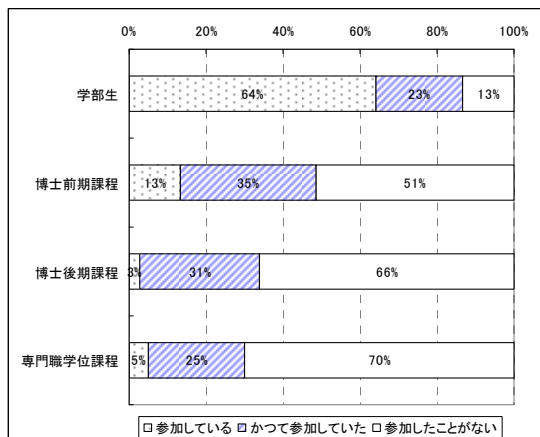


ちなみに、講義の間に休む場所をキャンパス別にみると、南大沢キャンパスでは研究室が多いものの、サークル部室、図書館、学内の自習・休憩スペースがバランスよく分布していました。これに対し、日野キャンパスでは研究室が66.3%と突出していました。また、荒川キャンパスでは研究室をあげる者がもっとも多いのに加えて(30.6%)、その他をあげる者が22.6%と多く、この点に特色があるようです。

● 課外活動 ●

○ 学部生で課外活動に参加している者は約6割

サークル活動への参加は学部生の64%が参加しており、23%がかつて参加していたと回答していました《右図》。この結果から、学部生では約9割が現にサークル活動に参加しているか、かつてサークル活動に参加していたことがある者であることがわかります。これに対し、博士前期課程、博士後期課程、専門職学位課程はいずれも参加していないと答える者が多数派であり、博士後期課程と専門職学位課程ではそれぞれ3%、5%と非常に少数であることがわかります。



○ みやこ祭、青鳩祭の参加率は6割前後

課外活動では大学行事への参加率も気になりますが、この点について全体をみると、みやこ祭では49.2%、楓祭では1.2%、青鳩祭は5.2%、大阪府大戦は8.9%でした。ただし、この値はサークル参加が少ない大学院生を含む値です。

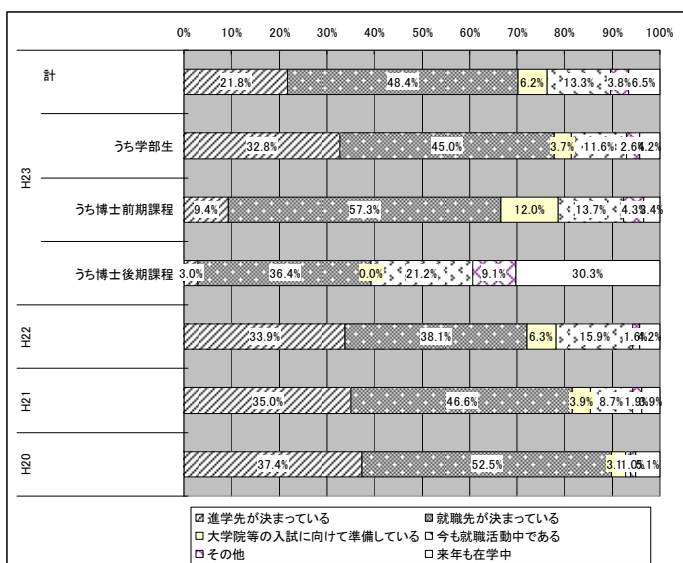
そこで、サンプルを学部生に限定し、大学行事への参加をキャンパスごとに集計した結果が左図です。みやこ祭は、南大沢キャンパスの学生で66.2%、他キャンパスの学生も40.0%、45.3%と一定の参加者が得られていることがわかります。また、青鳩祭は荒川キャンパスの学生に限れば59.4%と6割の学生が参加しています。その一方で、楓祭と大阪府大戦は10%前後の参加者しか得られていません。

● 進路 ●

○ 学部生の就職内定者は前年より増加

昨年度の調査では、調査期間中に就職活動を行っているという回答した学部4年生は15.9%でしたが、今回の調査では11.6%でした。また、これに伴い、就職先が決まっていると答えた学生も昨年度の38.1%に対し45.0%の学生たちが就職先が決まっていると回答しています。

大学院生についてみると、博士前期課程2年生では57.3%の学生が就職先が決まっていると回答しています。就職先が決まっていると答えた者が多いのは、学部生と異なり進路に進学先が決まっていると答えている者が少なくなることで考えると考えられます。また、博士後期課程3年生では今も就職活動中であるが21.2%と他の類型に比べて多い結果が得られました。



注：一次的な仕事と進学も就職もしないは図作成の都合からその他として纏めた。

以上

(参考 調査概要・調査内容)

アンケートの概要 (2011 年度)

- 対象学年 : 学部生、博士課程 (前期・後期)、専門職学位課程
- 実施期間 : 2011 年 10 月～11 月
- 実施方法 : 質問紙を用いた郵送調査 (悉皆調査)
- 告知方法 : 調査対象者に質問紙を郵送
- 回収方法 : 郵送、または学生課窓口等への提出
- 母集団 : 9,005 人 (郵便未到着分 284 人を除くと 8,721 人)
- 回収 : 1,084 人 (回収率 12.4%)

(調査内容)

- あなた自身について (全員)
性別、通学したキャンパス、学部・大学院の別、所属学部・研究科、学年、出身高校の所在地
- 入学前の意識 (1 年生のみ)
志望順位、入学を選択した理由
- 現在の住居 (全員)
居住形態と賃貸料、居住地 (都道府県)、通学時間
- 個人の生活
授業料の負担方法、授業料の減免・分納について、奨学金について
- 家庭状況について
家族人数 (家族構成、兄弟姉妹人数)、主たる家計支持者、年間所得金額
- 学内での生活 (全員)
通学回数/週、学内で食事をする回数/週、昼食時のキャンパス内食堂利用回数/週
分散型キャンパスの評価 (日野、荒川キャンパス通学者のみ)
- 学習状況 (全員)
1 週間の生活時間 (授業への出席コマ数、授業の予習・復習・準備時間数、授業以外の学習時間数)、サークル活動の有無、アルバイトの有無、読書数/月
- 履修や単位・成績 (学部生のみ)
今年度前期までの成績
- 大学生生活の充実度 (全員)
1 週間の生活の充実度、大学の授業等勉強の充実度、教員に対する質問等の有無
- 大学で身につけた力と問題点 (全員)
自身の実力の評価、悩みや問題の相談相手、講義の合間に過ごす場所、大学行事への参加
- 将来について (全員)
学部卒業後の進路、インターンシップへの参加の有無および参加意向
- その他 (全員)
本学の良い点、改善点 (自由記入)